



Title	哲学という名のプラットフォーム : ラボカフェ/中之島哲学コレッジ
Author(s)	本間, 直樹; 松川, 絵里
Citation	Communication-Design. 2010, 3, p. 122-133
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5507
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

哲学という名のプラットフォーム

—— ラボカフェ／中之島哲学コレッジ

本間直樹 松川絵里

本間直樹 | Naoki Homma

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター／

大阪大学大学院文学研究科 准教授

コミュニケーション論を軸に、臨床哲学では、哲学的対話の方法論と実践、「こどもの哲学」、身体・セクシュアリティ論などに取り組む。CSCDではワークショップ記録を含めた映像コミュニケーションの実践的研究にも挑戦。

松川絵里 | Eri Matsukawa

大阪大学大学院文学研究科文化形態論専攻博士後期過程

ミシェル・フーコーの権力論を中心にジェンダー・セクシュアリティについて研究する傍ら、哲学的対話の実践（育児サークルでの哲学カフェなど）にも取り組む。2009年4月より、対話型カフェを通じた社会連携活動に関するリサーチアシスタントを務める。

「哲学カフェ」から「哲学コレージュ」へ

哲学カフェとは、喫茶店など人々の集まりやすい場所で、「進行役」と呼ばれる者の導きのもとで一つのテーマについて、2時間程度、参加者全員で話し合う活動である。1992年にフランス、パリのカフェで自然発生的に行われ、その後、世界各地に広まっている。進行役が議論をリードすること以外には、決まった定義や方法はない。哲学カフェは、もともと大学とは独立した哲学的討議のための市民活動として始められ、研究を分かりやすく世に知らしめるための研究機関の「アウトリーチ」活動ではない。

哲学カフェ開催のための不可欠なのは、(1) あるテーマについて話したい人たち、(2) 場所、そして(3) 進行役である。2000年より、大阪大学文学研究科哲学講座、臨床哲学研究室の教員や大学院生が中心となって、大阪や神戸ほか各地にて哲学カフェを継続している(2008年度末までの総数は約200回)。哲学カフェの開催にあたっては、通常、喫茶店など、人が集まりやすく話のしやすい場所が選ばれるが、場所によって参加者も異なることから、さまざま機関やプロジェクトと協働しながら、できるかぎり多様な場所で開催しようと試みている。各回の参加者は10人から30人程度で、リピーターは3分の1程度で、そのつどの新規参加者も多い。

一回一回の議論の成否は、(1) テーマが人々の潜在的な関心に訴えることができるか、(2) 集まった人たちが自らの関心をもとにその場で即興的に議論を構築できるか、そして(3) 進行役はこの二つを考慮してどのように適切な進行を行うのか、の3点にかかっている。そのためには、進行役による独善的なテーマ設定や進行法ではもちろんうまくいかない。同大学文学研究科では、学部生・大学院生を対象に「対話進行役」のためのトレーニングも行われているが、授業では大学生どうしの比較的等質な議論に終始してしまうため、授業以外に実践で腕を磨くことが不可欠となる。(大学における教育研究とは別の仕方

実践を支援し、教育研究を補完するものとして、2005年より、Café Philo（カフェフィロ）という団体が結成され、哲学カフェの運営やサポートが行われている）

2006年、大阪大学、京阪電車、NPO ダンスボックスの三者による共同プロジェクトの原型が発足し、CSCDが提供する対話型イベント「ラボカフェ」の一プログラムとして哲学カフェが建設中の現場で行われた（2007年も継続）。ほかの対話型カフェプログラムと比較して、哲学カフェは、ゲストトークもなく、参加者が主人公となって議論を作っていくことに大きな特徴がある。これら試験的なイベント開催を踏まえ、2008年10月より、完成したなにわ橋駅コンコース内「アートエリアB1」にて「ラボカフェ」が本格運営されるに伴い、上記の臨床哲学研究室とCafé Philoなどの協力のもとに、単発の哲学カフェ開催にはとどまらない大学発信の継続型のプログラムとして「中之島哲学コレージュ」が新たに企画されることになった。



〔図1〕「臨床哲学セミナー」（2008年10月31日）の様子

2

多様な知が行き交うプラットフォーム

「中之島哲学コレージュ」では、哲学カフェの精神を活かして来場者中心で議論することを主目的にしつつも、大学発信の新しい哲学の活動展開として、哲学カフェだけでなく、書評カフェやゲスト講師によるセミナーも織り交ぜた、継続型の複合プログラムが用意されている。CSCD 教員（本間直樹）がコーディネータを務め、文学研究科臨床哲学研究室、Café Philo、〈社会と臨床〉研究会のメンバーなどが企画者・進行役として協力し、主たるプログラムとして以下の3種類が提供されている。（詳細は[表]を参照）

- 哲学カフェ 各回の進行役が提案するテーマについて参加者全員で問いや意見を出し合い、議論する。
- 書評カフェ 毎回一冊の本をとりあげ、評者による紹介とコメントの後に、参加者で話し合う。本を読んでいなくても参加できる。
- セミナー 様々な領域で活躍する研究者や実践者をゲストに迎え、最初に話を聞いた後に、全員で話し合う。

〔表〕 中之島哲学コレッジ 活動履歴

日時	プログラム	テーマ	進行役など	※
2006年				
10/14 [土]	哲学カフェ	駅とはどのような場所か？	コーディネーター・進行：本間直樹	A
2007年				
10/13 [土]	哲学カフェ	さまざまなイメージのなかで ゆらぐアイデンティティ	コーディネーター：本間直樹 進行：中川雅道（大阪大学文学部3回生）	A
2008年				
10/24 [金]	哲学カフェ	“これでいいのだ” とは？	進行：桑原英之（Café Philo）	A
10/31 [金]	哲学セミナー(1)	臨床哲学セミナー	ゲスト：中岡成文ほか文学研究科臨床哲学研究室メンバー	B
11/7 [金]	書評カフェ	湯浅誠著『反貧困』	評者：三浦隆宏（摂南大学非常勤講師）	
11/14 [金]	哲学セミナー(2)	若者就労支援の現場から	講師：田中俊英（NPO 法人淡路プラッツ代表）	
11/21 [金]	哲学カフェ	仕事、楽しい？	進行：岡辺裕美（大阪大学大学院文学研究科院生）	A
11/28 [金]	哲学セミナー(3)	働くことをめぐって	ゲスト：臨床哲学研究室メンバー	
12/5 [金]	書評カフェ	メルローポンティ著『眼と精神』	ゲスト：光島貴之（画家） 進行・評者：高橋綾 井尻貴子	
12/12 [金]	哲学セミナー(4)	からだは考える	ゲスト：佐久間新（ジャワ舞踏家）、玉地雅浩（藍野大学教員）	
12/19 [金]	哲学カフェ	ファッションとセルフケア	進行：深田千晃（大阪大学大学院文学研究科院生）	B
2009年				
1/9 [金]	書評カフェ	『ひと相手の仕事はなぜ 疲れるのか—感情労働の時代』	評者：橋本亮（大阪大学文学部3回生）	A
1/16 [金]	哲学セミナー(5)	〈社会と臨床〉自分の生を生き きる：高齢者医療の現場から	講師：佐藤伸彦（砺波総合病院地域医療部副部長・外来診療内科部長）	C
1/23 [金]	哲学カフェ	働くことの対価とは？	進行：中川雅道（大阪大学文学部4回生）	A
1/30 [金]	哲学セミナー(6)	『生を切り崩さない仕事』を 考える	ゲスト：栗田隆子（有限事業組合フリーターズフリー組合員）	B
2/6 [金]	哲学セミナー(7)	コーヒーから考える環境	ゲスト：紀平知樹（大阪大学招聘准教授）	B
2/13 [金]	ワークショップ	〈ゴミ〉をわけてみる	進行：深田千晃（大阪大学大学院文学研究科院生）	B
2/20 [金]	哲学カフェ	「エコ？」	進行：岡辺裕美（大阪大学大学院文学研究科院生）	B
2/27 [金]	哲学セミナー(8)	〈社会と臨床〉自分の生を生き きる2：ホスピスの現場から	講師：田村恵子（淀川キリスト教病院ホスピス主任看護課長／ がん看護 専門看護師）	C
2009年春夏学期				
4/15 [水]	哲学カフェ	あいさつ	進行：井尻貴子（Café Philo）	A
4/24 [金]	書評カフェ	よろん？ゼロん？（柿崎明二著 『次の首相』はこうして決まる』）	進行：三浦隆宏（摂南大学非常勤講師）	
5/13 [水]	哲学カフェ	市民とは誰か？	進行：高橋綾（Café Philo）	A
5/29 [金]	書評カフェ	内田樹著『街場の教育論』	評者：中川雅道（大阪大学大学院文学研究科院生）	A
6/10 [水]	哲学カフェ	家に帰る、とは？	進行：岡辺裕美（大阪大学大学院文学研究科院生）	A
6/26 [金]	セミナー	〈社会と臨床〉自分の生を生き きる3：患者の立場から	講師：藤本啓子（『患者のウェル・リビングを考える会』代表） 進行：西村高宏（東北文化学園大学教員）	C
7/8 [水]	哲学カフェ	女性専用車両は差別か？	進行：松川絵里（Café Philo）	A
7/24 [金]	セミナー	教育から移民問題へ	講師：松葉祥一（神戸市看護大学教員） 進行：中岡成文（大阪大学大学院文学研究科教員）	B

※ A＝協力：Café Philo B＝共催：臨床哲学研究室 C＝協力：〈社会と臨床〉研究会

いずれのプログラムにおいても、参加者全員で話し合いを行うこと、社会的で具体的な問題に関するものがテーマに選ばれること、そして、専門知識の提供よりもむしろ、参加者による議論が重視されることが共通している。大学での「哲学研究」の方法を大前提にせず、また「哲学」という活動をあえて明確に定義せず、参加者や話題提供者の意見から長期的にその枠組みを考え、具体的にかたちづくっていくことが狙いである。つまり、「哲学」が様々な専門知や世間知が一時的に接し合うプラットフォームとなる、そのことが期待されている。

参加者からの期待も小さくない。代表的な声として聞かれるのは、これまで哲学に興味があっても触れる機会がなかったので、気軽に哲学に触れられる場ができてうれしい／アクセスがよく、参加者層も多様なので大学でやるよりも参加しやすい／社会的問題について考える貴重な機会なのでぜひ続けてほしい／世代や職業を超えてこんなに真剣に話し合うことはない／人の意見をいろいろ聞いてとても頭を使った／自分とは反対の意見にも説得力があって驚いた、などである。

3

女性専用車両は差別か？

提供される全てのプログラムのベースとなっているのが、やはり哲学カフェにおける対話の経験である。ここでは、2009年7月8日（水）19時から21時まで行われた哲学カフェの様子を紹介しながら、哲学的対話の特徴について解説する。



〔図2〕「哲学カフェ」（2009年7月8日）の様子

3.1 議論の様子と内容

哲学カフェでは、スライド・資料・板書などは使わず、テーマと参加者の発言だけをもとに議論が進められる。参加者は互いの顔が見えるよう円弧状に並べられた席に座り、発言したい人は手を挙げ、進行役に指名され、マイクを受け取ってから発言する。発言は参加者の自発性に任されており、他の人の意見を聴くだけの人もいる。

この日、「女性専用車両は差別か?」というテーマに集まった参加者は、途中から来た人も含めて25人ほど。男女の割合はほぼ半々で、年齢層も様々。初めて哲学カフェに参加するという人も5～6人いる。

進行役が、哲学カフェについて簡単に説明したあと参加者に発言を促すと、さっそく議論が始まった。「女性専用車両は痴漢から女性を守るために必要」、「痴漢をするのは男性のごく一部なのに、男性全員を排除するのはおかしい」、「異性愛を前提とした女性専用車両は、同性愛差別なのでは?」など、女性専用車両に賛成の人もいれば反対の人もおり、その理由も様々だ。その後、参加者は出された意見について、「女性専用車両は誰のどういう目的のためにあるのか」や「車両に乗る人を分けるとはどういうことか」といった論点から検討を加えたり、それぞれの主張のなかで「差別」という言葉がどのように使われているか吟味したりした。最後に、10分ほど感想を述べ合いながら議論を振り返り、2時間の哲学カフェを終了した。

3.2 どのようなテーマがふさわしいのか？

哲学カフェのテーマとしては、(1) 日常生活と関連するもの、(2) 誰もがそれについて考えることのできるもの、(3) 根本的な問いを含むものが望ましい。今回の進行役(松川)は、ジェンダー・セクシュアリティの問題に関心があり、性差(ジェンダー)が社会のなかでどのように機能しているかについて研究している。今回は会場が駅ということもあり、「女性専用車両」を誰もが知っている具体的な事柄として取り上げることにした。「女性専用車両は差別か?」というテーマには、「女性専用車両」という具体的な事柄と、「性差(ジェンダー)とは何か?」、「差別とは何か?」という根本的な問いが含まれており、参加者は両者のあいだを行ったり来たりしながら徐々に思考を深めることができた。

3.3 参加者は何をするのか？

哲学カフェのなかで、参加者は単に自分の意見を述べるだけでなく、以下の作業を繰り返しながら、それぞれの主張や根拠について共同で吟味を行う。

a. 発言してみる

参加者は、テーマに関して思ったことや疑問などをとりあえず口に出してみる。

b. 発言のなかに含まれる主張や意見を確認する

意見や主張が明瞭でない場合には、進行役の助けを借りながら要点をまとめるなどして、発言に含まれる主張や意見を確認する。

c. 出された意見に対して意見を述べる

他の参加者の意見に対して、「先ほどの意見はこういうことだと思う」と解釈を述べたり、反論を述べたりする。

d. 自分の意見に対する意見を聴いて、どう思うか確認する

互いの意見の違いや他の参加者の言葉を通して、必要があると感じたら、足りない要素を補ったり修正を加えたりしながら最初の意見を語

りなおす。

e. 意見の前提を問い返す

それぞれの意見の前提や言葉の意味を明らかにしながら、主張や根拠について吟味する。

f. 議論を振り返る

必要に応じて議論を振り返り、自分たちがいま何をしているのか、これからどのように議論を進めるべきかを考える。

3.4 進行役は何をするのか？

進行役は以下のことを心がけながら、参加者が十分に主張や根拠を吟味できるようサポートする。

a. 意見の複数性をあぶりだす

テーマについて十分に吟味するためには、議論が一部に偏らないようにすることが重要である。進行役は、「いまの意見には反論がありそう」と反対の意見を引き出したり、「いまの意見は、先ほど出た意見と同じですか？」と意見をつき合わせたり、ときには自ら異なる意見を提示したりして、意見の複数性をあぶりだす。また、長々と話し続ける人、何度も同じ発言を繰り返す人に対しては発言の要点をまとめてもらうなどして、他の人の参加や発言を妨げないよう配慮する。

b. 発言を引き受けさせる

哲学カフェでは、自分の経験をもとに話すことを重視している。しかし、参加者のなかには、自分の意見の代わりに本やメディアで見聞きした情報や知識を持ち出す人もいる。彼らは、理由や根拠を尋ねられても答えられないことが多く、自分の発言を自分で引き受けられていない状態にあるといえる。このような参加者に対しては、「なぜ、いま、このタイミングでそれを話そうと思ったんですか？」と尋ねてみるのも一つの手だ。参加者が、自分の発言について議論のなかでもつ意味を自覚し、自分自身の発言を引き受けるきっかけとなる。

c. 吟味を促す

進行役は、テーマについて考えるために足りない要素や検討が必要な論点を、その場の議論の状況から瞬時に判断し、参加者自身が考えられるよう促す。たとえば、「どうしてそれが『差別』なの?」と言葉の意味を尋ねたり、他の参加者に「いまの意見について質問はありませんか?」と問いかけたりして吟味を促す。また、議論の途中で論点を整理したり、「いまの発言は先ほどの意見に対する反論ですか?」と尋ねたりして、参加者自身が議論の状況を自覚できるよう仕向ける。

d. 複数の主張を拮抗させる

哲学カフェという場合は、単独で真理を追求するより、むしろ複数の主張が拮抗し合うことによって「本当らしいもの」を浮びあがらせるのに相応しい。たとえば、性については中立的な立場や唯一の真理はありません、むしろ立場の複数性やそれぞれの立場からみえる現実の差異こそが性という現象や問題を構成していると考えられる。このような真理を浮びあがらせるには、単に個々の意見がバラバラにあるのではなく、それぞれの主張が対抗し合いながら互いに屈せずある状態をつくりだすことが重要になる。そこで進行役は、わざと反対の主張をつき合わせて参加者どうしが弁論を闘わせるよう仕向けたり、参加者の一人と一对一の議論を展開したりして、議論に簡単に決着がつかないようにする。

4

今後に向けて

—— 誰のための「コレージュ」なのか？

本プログラムにおいては、哲学カフェからさらに一步踏み出しつつ、大学での公開授業・講座という既存の試みと区別するために、あえて「コレージュ」という聞き慣れない名称が掲げられ、新たな「学びの場」

として大学人と社会人の相互学習の場をつくることが意図されている。企画者や協力者と来場者の双方にとって意義のある活動が今後も目指されるべきだろう。

大学／企画者にとっての意義は、大学院生や教員の教育・鍛錬の場として活用できる点にある。自分の問題関心について専門領域で共有されている概念や問題設定の枠組みからいったん離れ、専門外の人も共有できるような視点から関心を捉えなおすことは、専門的に学んできた概念や理論が社会的な問題関心とどう接続するかを再考するきっかけとなるだろう。実施後に参加者の意見を取り入れるという調査的な視点ではなく、企画を練り上げる段階から、その場での反応、実際の失敗例、プロセス全体を通して新たな視点を得られるなど、大学院生や教員にとっても、企画者として参加する意義は大きい。

また、参加者は、主催者が提供するプログラムの「受け手」としてそこにいるというより、議論に参加することによって共に場を作っていく「担い手」として存在している。参加者がいなければこれらの企画が成立しないばかりか、同じテーマや素材でも、参加者の関わり方によってその場で論じられる内容は大きく変わってくる。一度も発言せず他の人の意見に耳を傾ける参加者もまた、その態度や反応によって発言者の発言に影響を与えることから、場の「担い手」であるといえるだろう。参加者は議論を実践しながら、まわりの人々や学習の資源（テーマや素材）との関係をどのように組織し、変容させていくかを自覚的に学んでいくことが期待される。

以上のことを確かなものとするための課題も多い。一つ目は、どのようなテーマを提案していくべきか、である。中之島哲学コレッジには毎回様々な参加者が訪れるが、テーマに応じて参加者層も異なる。政治系のテーマでは男性の参加者が多く、アート系のテーマでは若い女性が多いなどの傾向も見られる。また、回によっては初めて参加する人が約半数を占めるなど、これまで参加してこなかった人が新たに集まることもある。多様なテーマに対するニーズが潜在的にあり、それらを掘り起こすためには、問題に関心をもつ人たちに企画づくりの段階から協力してもらうことが不可欠となる。

したがって二つ目の課題は、場づくりに人を巻き込むにはどうすればよいのかである。協力している臨床哲学研究室には、医療、教育、環境、科学技術、セクシュアリティなど、様々な社会的問題にアプローチしている研究者・大学院生がいる。これらの研究者が積極

的に企画に加わることによって、より多様なテーマを提案することが可能になるだろう。とはいえ、専門的な研究とこのような場づくりとは即座には繋がらない。知識をやりとりする場ではないため、単に専門用語をわかりやすい言葉遣いに置き換えればよいというわけでもないし、研究者のコミュニティで共有されている問題設定や議論の仕方をそのまま持ち込むわけにもいかない。自分の問題関心を専門領域の異なる人と共有するにはどうすればよいのか、議論に不馴れな人とともに考えるにはどうすればいいか、といった視点から捉えなおす必要がある。また、他大学の学生の関心も高い。大阪大学内外の研究者・実践者を協力者として巻き込みつつ、魅力ある企画づくりを促すためには、異なる関心をもつ企画者どうして、プログラムの内容や素材の提供の仕方についてフィードバックし、相談し合う仕組みをつくっていくべきだろう。

また以上のために、各種プログラム実施法の改善の余地もあるだろう。哲学カフェに対する参加者の需要は高いが、それに比べてセミナーの場合、ゲストによる知識提供が時間的にも大きな割合を占め、議論のための時間が不足するのも事実である。ゲストトークを最小限度（例えば30分以内にし、話題提供もできるだけコンパクトに済ませる）などの工夫が必要となるだろう。

哲学コレッジは、知の送り手としての大学人、受け手のとしての社会人のための場ではなく、きく・はなす・考える主体としての彼らが様々な問題に対して新たな参加の仕方を見つけるための場なのである。

参加にとって最も大切なのは、立ち止まる、話す、考えるための余地をつねに用意していることだろう。また、哲学する、考えるとは、一本の線路の上をどこまでも先に突き進むことではない。むしろ、それまで自分の乗っていた思考からいったん降り、そして次の思考に乗り換える一つのステップといえるだろう。便利でなくてもよい。迷ってもよい。このプラットフォームとは、そのような空間ないし空白を象徴しているのかもしれない。